

日中科学技術 No. 41

1984.10.20

発行所
日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島1-7-11
南新ビル6F TEL.(03)815-7241

第24回常任理事会についての報告

昭和59年9月7日、午後1時30分から4時、学士会館で開かれた。

出席者は、(会長) 有山兼孝、(常任理事) 鹿取一男、茅誠司、野上茂吉郎、橋口隆吉、渡辺武男、(理事) 弥永昌吉、鈴木次郎、藤田良雄、(幹事) 相馬胤和、(事務局長) 肥後孝ほか委任状提出16名。

1. 報告事項

(1) 中国科学院関係(専門学者派遣)

- a. 小川智哉学習院大学教授訪中、協会推薦に対し同院より招待状到着、8月1日～15日、訪日報告2頁掲載。
- b. 中嶋貞雄東海大教授、協会推薦(物性物理学)に対し同院招待状到着、10月29日～11月10日、協会は国際学会への寄与を考慮し国際旅費半額補助を承認。
- c. 同院科学技術大学日本語教師(期間1カ年)協会推薦の永井淳子女史、8月30日成田発。

(2) その他の交流案件

- a. 太陽エネルギー訪中団(団長押田勇雄上智大学教授以下4名)、中国科学技術センター要請に対し協会推薦(復路航空便中国側負担)、7月30日～8月8日訪中し帰国、訪中報告4頁掲載。
- b. 寧宝林東北工学院副教授の訪日招待及び協会補助の決定、11月22日～29日開催の燃焼シンポジウム出席及び本邦内学術交流のため同副教授招待費補助申請について、会長

名招待状の発出と滞在費の一部補助について承認。

- c. 劉曉蘭中国鉄道部北京二七機車工廠職工大学教師の留学招待に関し、所属長より招待受諾、留学承認の回答が到着した。このため留学先への入学準備、滞在費(協会用途指定寄付金)募金の後援団体活動支援等に協会が必要な支援を行うことを承認。(なお、「劉曉蘭留学支援百人委員会」は9月18日募金の呼掛けに着手。(注 留学先電気通信大学の入学許可は10月4日に出された)

d-1. 南京水利科学研究院訪日団(前号2頁記載)は8月13日来日、8月1日本会との懇談。(要旨7頁)、9月22日帰国。

2. 中国科学技術協会国際部葉副部長来訪、8月7日、審議(1)-②参照。

3. '84日中青年友好交流団の派遣について8月22日打合せ開催、中国側から寄せられた日程とそのうちの学術交流予定等を報告。(なお、同団の訪中報告は8頁掲載)

e. その他、交渉中の交流案件について状況報告を受け、若干の意見交換を行った。

(3) 日中民間人会議報告:橋口会長代理(40号2-6頁)

2. 審議事項

(1) 中国科学技術組織との明年度交流計画

- ① 中国科学院…訪中科学者の推薦は、専門に関して同院が歓迎しうるよう配慮する。適任者が多忙で事実上都合がつかない場合が少なからず生ずるので、各人の回答待て

なく10人以上の候補を選出し、訪問可能時期を複数にし調整可能な方法をとる。中国科学院からの希望専門分野提示も考える。

- ② 中国科学技術協会… a. 橋口会長代理報告による助手的研究者の訪日受入提案は(39号1頁参照)同協会が滞在費を負担しないのであれば実行上困難がある。しかし同協会国際部葉副部長が11月再来日の際に明年度少くとも2~3人の受入を実現したいとの希望には検討を続けて対処する。… b. 訪中すべき専門家は、aの問題と切離して中国科学院の方法に準じて4~5名程度を実現方希望を出す。

- ③ その他…訪中・訪日とも、質の良い学術

交流は中国側がかなり積極的になっているので、役員及会員の協力により個別的に先方の意向を生かして対処する。

- (2) その他

- ① 会費滞納者の扱い…2カ年以上の滞納者は会報送付を止めて会費請求を続け、納入があれば中止以後の分を遡って送付する。

2カ年連続請求しても何ら意思表示がない方は会員資格を失うものとする。

- ② 協会は会員の会費により運営されており、誠に感謝に堪えない。未納の方が復活し会員としてご協力願えるようになることにもっと努力する必要がある。

日中交流ニュース

中国科学院成都生物研究所「応用微生物・醱酵工学訪日団」の来日

団長：呉衍庸（成都生物研究所微生物研究室主任）、団員：張発群（同上研究室副主任）

上記の訪日団は、9月25日大阪着来日し、10月5日成田発帰国した。滞在中の訪問先は以下のとおりである。

関西：白鶴酒造KK、（財）醱酵研究所、大阪府立大学農学部、サントリーKK中央研究所、大阪市立大学理学部、大阪市下水道局汚水処理場。

関東：東京大学応用微生物研究所、東京大学農学部、協和醱酵KK、お茶の水大学家政学部、大蔵省醸造試験所、キッコーマンKK。

結晶工学の訪中報告

日中科学技術交流協会からの中国科学院招待科学者として本年8月1日から15日まで、訪中する機会を得た。ここに簡単に交流の経緯について報告する。

今回は、中国での滞在費は先方、日中間の旅費は自己負担ということで、中国科学院に日程調整

10月3日協会事務局長が宿舎訪問：四川省は日本との学術交流が少く、私どもの専門で日本との差について学びたくて、かねてから訪日の実現を望んでいた。今回は協会のお蔭で訪日できて感謝にたえない。訪日先での時間は少く、忙しく廻った印象は簡潔に述べにくい。訪問先の熱意に接したことと将来の専門交流に役立つ連絡や多くの友人ができたことは訪日の大きな成果である。帰国を前に、御協力頂いた皆様への感謝の気持ち一杯であると述べられた。

（協会刊行の中国文訪日手引書「日本」を携行して役立った由。なお友人への手土産に3冊手交）

学習院大学教授 小川 智 哉

をして頂いた。それは、私の訪問希望も入れられて次のようなものとなった。

8月1日(水)午後 北京着友誼賓館へ 夕食後物理研究所の張教授が表敬訪問。

2日午前 物理学研究所の主だった方々と会い、「光散乱トモグラフィーによる結晶欠陥の観察」

について講演。

- 午後 物理学研究所の実験室見学。
- 夕 中国科学院外事局 崔泰山先生のレセプション。

3日(金) ○午前 物理学研究所で「日本の結晶工学の現状」に関する座談会。

○午後 人工晶体研究所で人工ダイヤモンド、人工雲母、人工水晶の育成とそれらの応用製品に関する研究と開発について参観。

4日(土) 八達嶺(万里の長城)と明の十三陵参観。

5日(日) ○朝 張教授の表敬訪問。

- 北京-長春(飛行機の出発が2時間遅れる)
- 長春 長白山賓館に入る。

6日(日) ○午前 物理学研究所参観。

○午後 光学精密機械研究所で「光散乱トモグラフィによる格子欠陥の観察」について講演。

○夕 物理学研究所のレセプション。

7日(月) ○午前 光学精密機械研究所参観。

○午後 同所で「日本における結晶工学の現状」について話す。

○夕 吉林省科学技術開発交流センターのレセプション

8日(火) ○午前 吉林省吉林激光材料廠参観。

○午後 吉林市内遊覧。○夕 レセプション。

9日(水) ○長春-北京 昼食と北京市内見学。

○北京-西安 人民大厦泊。

10日(木) 秦始皇帝兵馬俑博物館参観。

11日(金) 乾 陵

12日(土) 大鐘樓, 大雁塔, 小雁塔など参観。

○西安-上海 静安賓館泊。

13日(日) ○午前 光学精密機械研究所参観。

○午後 同所で「光散乱トモグラフィ」について講演。

○夕 「雑技」の見物

14日(月) 自由行動。

15日(火) 上海-東京

この間ほとんど常に中国側の誰かが1人私につきそって、車の手配、航空券の購入などを手際よくこなして下さった。中国では航空券を購入する

のには一日行列する必要があるとか、思った日にホテルがとれないといった話を耳にするにつけ、今回の私の旅行は大名行列であったと思う。この点は感謝にたえない。

さて、私はいろいろな所で結晶育成施設を参観する機会を得たが、今回の私の印象は「すごい」の一語に尽きる。この「すごい」の中には良い意味も多少別な意味も含まれている。

すなわち、イットリウム・アルミニウム・ガーネット結晶(YAG)にしろ、CaF₂にしろ、大型の良質結晶を作っていた。YAGの場合、直径20~25mm、長さ180~220mmで dislocation free, かつ干渉形(米国Zygo製)に入れても干渉縞の乱れの殆どないものが出来ていた。

レーザーの発振特性については良くわからないがこれらの結晶は実に見事でこれは良い方の「すごい」である。が、この育成に180時間又はそれ以上かけているとのことであったが、この結晶の径制御はなんと人間。人が常時結晶の直径変化を監視し、手動的に系を制御しているのだ。1時間交代とのことだが、不寝番が一週間以上も続く計算になる。中国の結晶は、中国の秀れた工芸品と同様「fine art」なのだ。これがもうひとつの「すごい」で、現在の日本では決して起こり得ないことであろう。

短い訪問から結論めいたことは何も言えないが、'76年、'79年と訪中した私の目には、中国は変わった、変りつつある、ということだけは感じとれた。

一番強い印象は、女性の服装が色彩に富み、明るくモダンなものになったことと、赤地に白で大きく書かれたスローガンやキャンペーンが非常に少なくなったことだ。そして、いろいろな形のカメラを持った老若男女が、名所旧跡にあふれ、一生懸命に写真を撮っている様は、昭和28年~33年頃の日本に良く似ている。私はカメラ狂なので、彼らのカメラをつぶさに観察すると、二眼レフ、一眼レフ、レンジファインダー付(これらは35mm)ありでブランドも海鷲(seagal), 長城(Great Wall), 牡丹などいろいろあった。10

億の人口が日本と同じ割合でカメラ愛好者になった時、カメラ王国は中国になろう。そして、日本がドイツをカメラの王座からひきづり下したように、25年もすると中国産のカメラが世界を圧するようになるかもしれない。

こんなことを思いながら街を歩いていたら、当時シニストで名をはせたH博士が日本の若い女性を評して、「ドブ板をまたいで映画スターが出て来る」と言ったのを思い出した。というのは、薄汚ない(失礼!)家から素晴らしい美人が正装して出て来たからである。崔泰山先生は「西歴2000年にオリンピックを中国(北京?)でやる事が出来るようにすべてを用意しているのですよ」とおっしゃられたが、多分2000年には中国オリン

ピックが成立し、中国が金メダルを独占するという時代になるのかもしれないと思った。

さて、日中の科学技術交流について、長春物理学研究所では、范希武教授、候博士から固体の光物性研究に関して、日本のしかるべき組織または機関との交流を、また吉林激光材料廠では趙副工場長からLiTaO₃、またはLiNbO₃を利用したSAW素子作製に関し日本から技術導入をしたいとの強い要望が出され、是非仲介の労をとって欲しいと依頼された。どなたかにお力添え、御助言を頂ければ幸いである。

2週間という短期間であったが、中国の変化を身に感ずることが出来、貴重な訪問であった。

太陽エネルギー利用技術交流団訪中記録

私ども下記4名からなる太陽エネルギー利用に関する技術交流のグループは、本年7月30日より8月8日までの10日間訪中し、北京、天津、上海の各都市において、講演、見学、および中国技術者との懇談会を通じて、日中科学技術交流をかなり深めることができたと考えている。また、行く先々で、温かい歓迎を受け、人と人との交流も同時に深めることができた。これは、私共の無形の宝として、今後末長く心の中に残ることであろう。

訪中団の団員(敬称略)

○押田 勇雄(上智大学理工学部教授、物理学)

○中島 康孝(工学院大学工学部教授、建築学)

○渡部 康一(慶応義塾大学理工学部教授、機械工学)

○和泉 孝喜(シャープ株式会社技術本部エネルギー変換研究所長、電気工学)

今回の訪中についての、きっかけを作られたのは、学習院大学教授であり、同時に日中科学技術交流協会の幹事でもられる小川智哉氏である。

エネルギー変換懇話会という、小川氏も私も所属している科学者の集りを通じて、同氏から私に

上智大学教授 押田 勇雄

エネルギー全般についての、訪中グループを作り、それを引率することについて、内々打診があったのは、1年以上も前のことと記憶している。

私はヨーロッパ、北アメリカ、オーストラリア等には行ったことがあるが、中国本土はまだ1回も訪れたことがない。世界人口の4分の1を保有する大国、そして2千年以上もの間、日本にいろいろな文化をもたらしてくれた大国は、ぜひ一度訪ねたいと思っていたところで、もしそのような機会があったら、喜んで出掛けたいと返事をおいた。

その後は、私も忙しくて、そのことは忘れていたが、今年になって、小川氏から、先方はとくに太陽エネルギーの分野での訪中団を強く希望している旨のお話があり、太陽エネルギーについては、当時私は日本太陽エネルギー学会の会長をしていたこともあり、もともと私の専門分野であるから、二つ返事で訪中の意志をお伝えしたのである。

お蔭で、わずか10日間の、かなり忙しい日程ではあったが、私がかねての念願を果すことができ、他の団員諸氏も、「忙しくはあったが有益、かつ楽しかった」と申しておられるので、私もたいへん

嬉しく思っている。

小川氏も他の件で、私共と同じ頃訪中されたらしいが、中国でお目にかかることができなかつたので、この文を借りてお礼を申し述べたい。

また、われわれの訪中について、先方との交渉や、お膳立てをして下さった日中科学技術交流協会の有山兼孝会長や、肥後孝事務局長に、厚く感謝する次第である。

以下日程を追って私共の彼地における行動の概略を記そう。

- 7月30日(月) パンナム17便で成田発北京へ、乗客の80パーセントほどは日本人らしい。18時55分(現地時間) 北京空港着。日本との時差わずか1時間で、また実質所要時間も約3時間約3時間半で、時差による疲れや、長時間座席に固定されている疲れなど、ほとんど感じず、改めて中国は近い国であることを体験した。バゲージをうけとると、通関に時間がかかり、飛行場を出たのは2時ごろであった。

中国科学技術交流中心の李纓氏(日本語が上手な人)と、中国太陽エネルギー協会の孟文嬌さん(女性)が辛抱強く待っていて下さり、恐縮した。

北京にある国際科学技術交流協中心が専用しているゲストハウス万寿路賓館に泊る。暑い日、日立製のウインドタイプのクーラーがついており、まず快適。

- 7月31日(火)

9:00から万寿路賓館にて、中国科学技術交流中心のメンバー(下記)と技術交流。

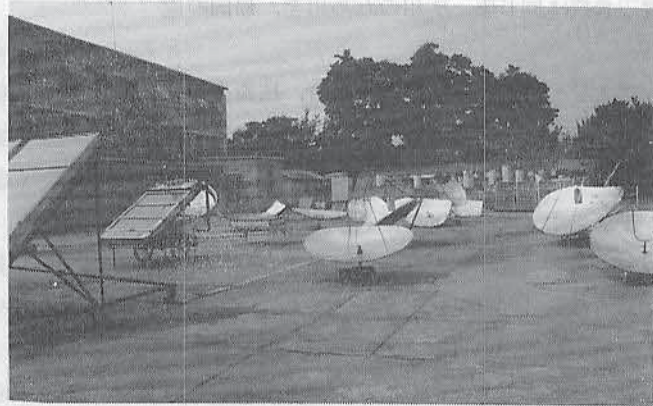
中国側出席者(敬称略)

- 彭 春喬(中国国家科学技術交流中心副主任)
- 胡 成春(中国国家委員会能源処副処長、中国太陽能協会常務理事)
- 張 超英(中国国家科学技術委員会)
- 龚 堡(副教授北京市太陽能研究所所长、中国太陽能学会副理事長)
- 倪 信興(中国科学技術交流中心)

10:30 龚 所長の案内で、北京太陽能(太陽エネルギーの意) 研究所を見学する。かなり大きな建物で、7部門よりなり、従業員も約250名とのことで、私の予想を上回る大きな研究所であった。

日本には「太陽エネルギー研究所」というものは無い。これは何とも情ないことである。

14:00 北京天文館の広場で、常設的に展示されている太陽エネルギー展覧会を見る。日本の温水器も、中国製の中に並べられていた。ソーラークーラーがかなり多く展示されているのは、やはり必要性があるものと思われる。その証拠に日射が強く、燃料の少い西北地方からの出品が多い。その一部は写真でお目にかける。



- 8月1日(水)

9:00 北京科学会堂で

○ 王 朴宜(中国太陽能学会理事長、清華大学熱能工学教授)

○ 李 元哲(清華大学熱能工学副教授)

両氏らと会見、引きつづき押田が「太陽エネルギー利用概論」の講演、和泉所長は別室にて太陽電池についての講演。

14:00 中島教授が「太陽熱の長期蓄熱とヒートポンプ組合せ方式の運転実績」について講演。通訳を務めた沈静珠女史は能力抜群、一同感心する。終了後少し時間があつたので、有名な魯迅博物館を見学。こんなところでも、日中の深いつながりの一端が見られる。

- 8月2日(木)

- 9:00 渡辺教授「太陽熱蒸留器」について講演。会場は前日に同じ。
- 14:00~19:00 質疑, 応答。皆真面目でよく勉強している。要点をついた質問も多かった。和泉氏のみ別室で。この方が聴衆多く, きわめて熱心で, 質問は主としてアモルファス(非結晶)太陽電池に集中した由。
- 8月3日(金)
- 早朝出発, 万里の長城(函谷関)へ。途中北京動物園に立ち寄り, 大熊猫(パンダ)を見る。帰途, 明十三陵を見学。
- 8月4日(土)
- 7:00 宿舎発。日本語の上手な薄栄志氏の案内で, 汽車で天津へ。渡辺教授は同じ朝, 所用のため出発, 帰国の途へ。天津大学へ行き, 下記諸氏と会合, 技術交流。
- 郭 晔光(天津大学教授, 天津太陽能源学会会長)
 - 王 先生(同, 土木科副教授)
 - 芳 海潮(天津市对外科学技術中心)
 - 周 昌圭(同, 副秘書長)
- 11:00 郭教授の自宅(アパート)のソーラー施設を見学。集合住宅のトロンプ壁は珍しいもの。かなり有効に働く由。ちなみに北京で許されている暖房期間は11月15日から翌年3月15日までで, その前後は燃料なしではかなり辛いということである。
- 19:00 再び列車で北京へ戻る。
- 8月5日(日)
- 7:00 北京発, 中国民航便で上海へ向う。
- 10:30 上海空港着。高氏(男性), 陸さん(女性)の出迎えを受ける。二人とも日本語が巧みである。
- 13:30 上海新宇電源廠見学。電源廠といっても, 主な業務は研究で, 電池を研究していた。
- 19:00 有名な上海の曲技(サーカス)を見せてもらう。パンダの芸が見られるのは, たぶんここだけであろう。
- 夜は錦江飯店に宿す。設備, サービス共に良く, 快適。
- 8月6日(月)
- 8:30 上海科学会堂で講演会。押田・中島教授の組と, 和泉所長の組と二つに分れる。ここでも, 太陽電池の組(後者)の希望が多い。演題, 内容等, 北京の場合とほぼ同じ。
- 中国側の主な出席者(敬称略)
- 刘 日照(上海对外科学技術交流中心負責人 = チーフ)
 - 楼 惟秋(上海機械学院太陽能研究所教授所長, 上海市太陽能学会理事長)
 - 程 如光(中国科学院上海硅酸塩研究所, 上海太陽能学会支部長)
 - 曹 国珮(上海有色金属研究所)
 - 李 国欣(新宇電源廠工程師)
 - 高(通訳, 前出)
 - 陸(通訳, 前出)
- 13:30~17:00 討論会(北京の場合と同様, 二班に分かれて)。和泉所長の班はやはりアモルファス太陽電池に話題が集中した由。
- 18:30 静安賓館にて, 上海对外科学技術交流中心主催の晩餐会(同中心負責人刘日照氏の招待)。
- 8月7日(火)
- 8:30 硅酸塩所を見学。主として硅素太陽電池の研究をしている。引きつづき, 隣にある冶金所を見学。所長は女性。ここでは主にガリウム砒素太陽電池を研究していた。
- 13:30 上海機械学院の見学。楼教授の説明を受ける。もとは太陽熱発電を研究していたが, 今はやめている。集熱器などの研究が主体。夜, 上海のエネルギー変換研究所の方々数名, ホテルに押田を来訪される。今秋, 訪日予定あり。その訪問先の選択についての相談であった。
- 8月8日(水)
- 11:10 上海空港発, 中国民航機(CA)で成

田へ向う。

以上は日時を追った行事説明。次に所見。

太陽エネルギー利用に関する限り、中国の研究の水準は、私が漠然と想像していたよりは、高かった。とくに外国の文献をよく読んでおり、知識としてのレベルは、国際的なレベルと比べても、そう劣るものではないとまで感じられた。

他方、独創的面、実験的面はやや劣るように見えられた。これは、資材面での制約や、「四人組」時代の後遺症もあるようで、無理もない点も見えられた。

しかし、太陽エネルギー利用については、これは中国の持つ本質的な欠点とは私は思っていない。中国人は、あるいは「科学的実験」の面では弱いかもしれない。しかし、「実践面」では強い。

今回は見学できなかったが、農村部に浸透しているメタン醸酵技術などはその一例である。

たしかに日本と比較すると、だいたい1955年(昭和30年)頃の感じで、生活レベル、経済レベルはかなり低い。

しかし、ふしぎなことに、1955年頃の日本のような一種の「悲惨な」あるいは「衰れた」感じは全くない。総体的にいえば、明るく、しかも悠々とくらしている。

人口が日本の約10倍もあり、したがって国民の生活水準が向上する速度は、たぶん日本の場合の10分の1であろう。

そうであっても、長い将来、中国は徐々にではあるが確実に進歩し、私共の水準に近づくであろう。

「人類の幸福」というのが抽象的な言葉でないとしたら、一人一人が幸福にならない限り、人類の幸福はない。

そうなると、世界人口の4分の1を占める中国の民衆が、どんな生活をするかが、日本にとっても、他人事ではない筈である。

日中交流も、抽象的な「お題目」でないとしたら、日本の1人と、中国の1人とがまず知り合うところから、本当にはじまるのである。

これが、私の今回の印象の、最も重要な点である。

おわりに、このたびの訪中では、上記にお名前をあげた方々はもちろん、それ以外の数多くの方に、たいへんお世話になった。一々お礼状を差上げてはいないが、ここに団員一同を代表して、この紙面を借りて、衷心から感謝の意をささげる。

南京水利科学研究院訪日視察団との懇談

8月31日 15:00~18:30 上野蓮玉庵

出席者 標記訪日団(40号2頁に名簿・訪問先掲載)全員6名:中国大使館劉伝玉科学技術書記官:協会側、有山兼孝会長、橋口隆吉会長代理、八十島義之助理事、事務局長以下3名。

1. 団長挨拶

中国経済の数年来の発展は著しい。中国は経済と科学技術の発展と改革のため開放政策をとり、外国の経験に学びこれを参考に批判的吸収に努めている。南京水利研も経済建設上の水利・水電・水運面の仕事を受持ち、責任は重い。

日本の20年来の顕著な発展における科学技術管理方面の経験を周到綿密に学ぶため来日した。今日まで18日間の成果は多大なものがあつた。とくに重点とした土木、港湾の3研究機関は予め質問書は提出したが周到な準備に感激した。

今回の成果は、協会の綿密な計画、手配、適切な変更措置によるもので深く感謝したい。

2. 技術面の印象

(1) a. 日本の科学技術の発展は教育による。

b. 研究テーマの選択が実際の必要に応じ、成果の普及に力を入れ、現場からのフィードバックで修正している。c. 研究者の養成研修にも力を注いでいる。d. 夫々が将来の研究発展計画をもつ。

(2) ダムの工事現場で施工管理と経験の結び付きが良い。例:土石を削る一方で植樹を心掛け、ダム完成後の観光地化も考慮した姿には感心した。

(3) 訪問先の討議過程で、資料・出版物交流等を発展させる基礎も生れた。訪日目的を達成できると確信した。

3. 旅行中の見聞と質疑

(1) 日本は社会教育と家庭教育が行届いている。それで子供達は礼儀正しく、清潔を重視し、社会秩序も良い。経済建設と精神文明確立の方針では中国との一致を見る。

(2) 山林保護が行届いた点を8字にすると“山あれば全て緑、水なければ清からず”

(3) 質疑：①緑の植生の話…日本でも工事による自然破壊の批判から最近実行し始めたこと…行届いた視察である。②台風災害は、中国では沿岸地帯の河口、海岸の防潮堤で陸地防禦が主である。③水利の研究機関は、北京は水利と水電を、南京は水運も受持つ。行政的に水利・電力部と交通部の所管、南京の水運は50年の歴史をもつ。④揚子江の水を黄河を越えて北送する事業は、1983年着工(第一期工事)、第2期はサイホン工事で黄河をくぐらせるもので、設計を始めている。北送の水量は、220^m³/秒で下流に砂が溜る心配はない。⑤ダム工事で、中国は2千年の歴史をもち素晴

らしいダムが多いのに改良計画とか模型実験に熱心なのは、1949年灌漑面積を50万畝から700万畝にする計画による。⑥中国の農村経済は、この2～3年で相当に変わった。5年続きの大豊作で食生活の大きな改善があり、総人口の80%を占める農村人口の1/3が農業で、他の2/3は機械農業、その他社隊企業の生産、農村加工工場、運輸等に従事しており、農村は建物の建替が盛んで、カラーTVはいつも売切れている。⑦砂漠地帯と水利研：砂漠研究所が砂漠を圧える手法を開発。砂漠地域の周りに風砂の著減現象を生んでいる。

⑧日本の山林を美しいと見られたが、1/3は保安林で、実は山林労働力不足により手入不十分という困った問題がある。⑨水利・水電学会は土木工学会の傘下にあるが独自活動をしている。後者は建築、土木関係者が殆んどである。⑩日中科学技術交流協会の有益な活動について、中国大使館もPRに協力するので、協会案内等届けて欲しい。

'84日中青年友好交流による中国訪問に参加して

日中科学技術交流協会青年代表団団長

北海道大学農学部助教授 寺澤 實

去る10月1日、中華人民共和国建国35周年を祝う行事が中国各地で華やかに繰り広げられた。この行事をはさんで、約10日間にわたり、日本の青年3千名が訪中し、中国各地で大歓迎を受けたことはマスコミ等で報じられた通りである。

昨年秋胡耀邦総書記が訪日中に日本の青年3千名を招待すると発表して以来、歓迎のための諸行事が中国各地において、1年がかりでしかも国家的規模で用意されていたのであった。すでに十数回訪中経験のある他団の団長の1人が、まったく予側しない歓迎ぶりであると感想をもらすほどであった。本協会からも10名の青年代表が団を結成し訪中に参加した。我団のコースは上海→南京→北京であった。各地での歓迎ぶりは我々の予想のはるかに及ばないところであって、心から感謝しつつ、これをお受けしたが、我々の訪中に当たっての勉強不足、準備不足に一同恐縮したことは特記

せねばならない。予期せぬ歓待にあって、土産の用意もなく、当方手ぶらという失態を演じる場面もあった。予想の甘さを恥じつつ、我々がこの歓待に答えるにはどうすべきか話し合った。その結果、出来るだけ多くの方々と知り合いになり文通を通じ息の長い友好を図る。訪中の記録を詳しく書き留め、これを活字として永く記念に残るものとしてまとめ上げる。以上をもって御好意にむくいようではないかと衆議一決した。以後、二人ずつ組みになって記録づくりに、今まで以上に励んだ。係を毎日決め、団としての行動記録をとるとともに各自の接触し得た方々との交流記録もなるべく詳しく残すこととした。写真のファイルを帰国後共同で整理することなどが了解された。現在、記録についてとりまとめ中であり、ここでは簡単な経過についての報告にとどめさせていただきたい。

経 過

9月25日(火):11:00 CAAC 5619 便にて上海へ向け出発, 上海着12:03(現地時間)。空港にドラと太鼓と踊りの大歓迎の人波。ドラの音に度胆を抜かれる。和平飯店にて旅装を解く。午後2時, 中国科学院上海分院を訪問。慶志純副院長はじめ多くの科学者の方々と歓談。中国訪問交歓会第一号。和気藹藹のうち話が進み, 海外に出たという緊張感なく, 新威の所を訪れた感あり。これからの訪中旅行が成功裏に終るであろうとの予感を得る。夕刻7時20分から上海人民政府にて市役員との会見。注道涵市長の歓迎の辞, 岡崎嘉平太氏の返礼。氏の日中友好の花が咲き実を結びつつあることを周恩来首相に報告に行けると述べたことが印象的。上海展覧会館にて歓迎立食パーティー。大盛況。夜半, 雨も上り, 噴水広場に会場を移して歌と踊りの輪。建物の輪郭を色どるイルミネーションが暗い夜空に映える。

9月26日(水): 午前中, 虹口公園にて歓迎パーティー。上海鉄鋼研究所の袁宝林氏をはじめとする所員の方々の歓迎を受け交歓会。日中友好交流記念の時計台の除幕式があり, これで魯迅先生のお墓とともに公園の名物が1つ増えたことになる。午後, 桃浦人民公社を見学。育種場(張克勤場長), 桃浦中学校(陳元烽校長), ゴムひも工場(陳伯英場長)を見学したのち, 公社内ホールにて歓迎パーティー。歌と踊りと。万元農家の代表, 尹茂生さん宅にて夕食を御馳走になる。もり沢山の御馳走18品, すべての美味。感謝して辞し, 夕刻から始まる上海体育館での歓迎レセプションへ。市長注道涵氏の歓迎の挨拶, 柳本嘉昭氏の返礼の挨拶。歌と踊りの豪華なショー。会場の人文字, 我々を圧倒す。9時50分閉会。

9月27日(木): 午前中, 復旦大学訪問。谷超豪副学長の挨拶, 盧義民外弁副主任の大学紹介のち学内見学。物理系(沈国華さん), 遺伝子工学系(孫崇栄さん)の2ヶ所。若い学生さん達が団員をとり囲んで歓談。話はずむ。なごりはつきないが, 再会を約して別れを告げる。上海駅へ。

見送りの人波。歓迎のための踊りを踊ってくれる着飾った女子学生さん達の列また列。汽車での別れは情緒たっぷり。上海の皆様, どうも有難うございました。

17:20 南京駅に到着。歓迎の花火と人波。ドラと太鼓と踊り。中国一の高層ホテル金陵飯店へ。夕刻, 同ホテルホールにて歓迎パーティー。大御馳走と歌と踊りと。10時すぎまではしゃぐ。少々はしゃぎ過ぎとの批判の声も会終了後耳にした(日本側)。

9月28日(金): 午前中, 南京第二幼稚園(徐守園長)を訪問。園児の歌・遊戯による大歓迎。全寮制であり, 小さなベッドの並んだ部屋は壮観。園児との別れを惜む。9時30分, 南京工学院を訪問。講堂で歓迎パーティー。管致中学院長の歓迎の挨拶, 歌とゲーム。工学院内見学。文革後初の女性Dr.(西ドイツ) 钰韋教授による生医化学工学系施設の説明。学院内留学生会館で昼食, 歓談。なごりを惜しみつつ学院を辞して玄武湖公園へ。桜洲に渡り, 南京作物局の方々と交歓会。歌と踊りと。夕食後, 江蘇省科学技術協会との友好会見を中止し(他に数団体がゆくとのことで, 我々が抜けても先方が困らないとの確認が得られたので), 三角さんを病院に見舞う。上海を出る時から腹痛を訴えていたが, 南京で一泊したのち, 今朝から入院していた。急性胃腸炎との診断。大川秘書長は付添で病院に泊まる, 御苦勞様。院長朱慶生氏, 内科主任載先生, 女医劉洛平さん 婦長朱晏さんら大勢の方々に見守られ三角さん順調に回復中。南京青年連合会主席林祥国氏の名でお見舞いの果物と花が届けられていた。一同感謝して病院を辞す。南京大学の学生丁菊香さんが通訳として一夜病院に付添ってくださる。感謝。

9月29日(土): 午前中, 中山陵へ見学。大川君と範さん病院へ。中山陵は孫文のお墓で南京屈指の遺跡。大変立派なものであった。帰途揚子江大橋を見学し, 最上段の自動車道路を時速70~80kmで往復。橋の中段を汽車が走るのを遠望す。大勢の歓迎の人波の中をホテルへ。三角さん元氣

に退院。全員で北京に行けることを一同喜ぶ。12時ホテルを出て南京博物館へ。かけ足の見学ながら、中国6千年の歴史を肌で実感。空港へ。我々の搭乗機は尾翼に赤い星のマークの入った軍用機。14:00出発。南京の子供達さようなら、再見。

16:00 北京到着。空港での踊りとドラと太鼓の熱烈歓迎の人波。国証賓館に入る。志賀、比田井の両氏、医者診察を受け胃腸薬をもらう、以後順調。人民大会堂での晩餐会へ。人民大会堂は、一階も二階も埋めつくすほどの大宴会場になっていた。王震同志の歓迎挨拶、次に日本側の返礼挨拶、他。大変な御馳走と、5千名以上の人がかもし出す熱気につつまれ団員、上気嫌で歓談。10時すぎ、なごりを惜しみつつ退堂。二階席中央の我団の席からの眺めは圧巻であった。

9月30日(日)：午前中、首都体育館で歓迎レセプション。胡耀邦総書記の挨拶から始まり、李先念氏、彭真氏らの挨拶がつづき、駐中国日本大使中江要介氏、日本青年団協議会会長小野寺喜一郎氏の返礼の挨拶。9時45分エキジビションの開始。歌と踊りと体操、京劇、etc. すべて豪華。会場を埋めた市民も一体となつての大歓迎レセプションであった。午後、中国科学技術協会を訪問。同協会主席周培源先生をはじめとする大勢の方々の出迎え。周先生の歓迎挨拶。有山先生、茅先生と親交が深いことを語られた。団長の返礼挨拶につづいて自由懇談会に入る。歌と踊りとアトムのパントマイム等、歓迎パーティーの余興がはずむ。鮑奕珊先生の閉会の挨拶。日本式の手締めを乞われる。はじめ日本側の団員のみで見本を示す。周先生の御健康を祈念して、3.3.7拍子、次いで、日中両国合同で、21世紀に向け、日中科学技術交流の益々盛んなることおよび日本の国際協力事業の益々盛んなことを祈念して、3.3.7拍子。大変なごやかなうちに閉会。場所を院の食堂に移し晩餐会。マオタイ酒の大盤振舞いに黒田さんいたく喜ぶ。大歓迎を謝して辞す、日中科学技術交流協会へ中国科学院から立派な花瓶2ヶをお土産にいただく。夜、自由行動を望む声もあったが、明日の行動に備え一同早めに寝ることとする。



中国科学技術協会にて。周培源主席(中央)。

10月1日(月)：中国建国35周年記念国慶節。天安門広場の閱兵台上にてパレードの観覧。鄧小平軍事委員会主席挨拶。パレードは、実に盛大な国威発揚の一大デモンストレーションであった。建国の日をこれだけ情熱を込めて祝う民衆のかもし出す熱気がむんむん。胸をはって通りすぎる姿が、はた目にもまぶしく感じられる。式典終了後、我々も人民大会堂まで徒歩で行進、会堂内で昼食。



人民大会堂のロビーにて一同勢ぞろい。晩餐会終了のあと。

午後、中南海の見学。団長らは別に集められ、国、地方の政府関係者、青年友好連、労働組合・党、文芸文化スポーツ、その他に分れて入場。各グループで胡耀邦総書記と一緒に写真を撮る機会を与



中南海で日本側の訪問団の間を忙しく挨拶して廻る胡耀邦総書記(中央)。中国民衆から気さくな親爺と親しまれる。

えられる。夜、天安門広場にて北京の若者達との交歓会。広場の三方から、つぎからつぎへと打ち上げられる花火に彩どられつつ、歌とダンスの輪また輪。はたまた花火。北京の若い労働者達の日本の科学技術へ向ける眼差しが熱いものを感じる。多くの友人を得る。

10月2日(火) 記念植樹へ2名参加。他の団員は万里の長城見学。国際友誼林にて日中科学技術交流協会の立て札のある区画へ1本の花小松を植樹。中国側のホスト、ホステスの方と一緒に穴を掘り、汗を流す。西暦2000年にオリンピックの開催をめざしており、その際この地にオリンピック村を建設する予定とか。将来構想図によると一大観光名所になるようである。その節には訪中し、本日の松が大木となったのを見ることを楽しみにしつつ歴代の皇帝の異民族への侵入への恐怖心を慮る。帰館後合流し、範さん、邱さんを囲んで夕食をしに外へ出かける。市内を散策、買物、見物。

10月3日(水)：午前中、清華大学訪問。周遠清教務処長はじめ、いずれも日本へ留学経験のある先生方ばかりが集まって下さる。お互いに1人ずつ立って自己紹介する。皆さん日本語が堪能で、団員との会話がスムーズにはずむ。爽り多い会見であった。堅苦しい挨拶抜きの見会であったのが印象的。大学の設備も充実している。帰りに王さ

ん、藩さんのお宅へ2班に分れて訪問させていただく。日本の5階建公務宿舎に類似。御好意に感謝す。午後、故宮を参観。広大な敷地に精緻・華麗な建築また建築。大多数は台湾に運び去られたとはいえ、残りの宝物群にも圧倒される。台湾にある宝物を偲ぶ。夜の文芸プログラムには参加せず、明朝の早起きに備える。

10月4日(木)：5時に起床し、飛行場へ。熱烈歓迎の人波。さようなら北京の人々。熱烈歓迎どうもありがとう。再見、再見。CAAC 5121便にて出発。無事大阪へ着く。10月28日に記録の整理のため、随想文、写真等を理科大に持ち寄ることを約束して解散。あっという間の10日間であった。寺澤、大川、藤崎の3名は日中科学技術協会までおもむき、肥後孝事務局長へ帰国報告をする。

おわりに

旅のはじめからおわりまで真摯にお世話いただいた範曉峰、邱華盛の両氏には団員一同、誌上をお借りして厚くお礼申し上げます。

又、またとない機会を与えていただいた本協会の関係各位の方々に心から感謝致しますとともに、日中友好関係確立のために永年御努力いただいた先達諸氏に深く敬意を表し、感謝申し上げます。

最後に訪中団員の名簿を掲げます。

'84日中青年友好交流参加
日中科学技術交流協会代表团(ⅡE-4)
1984年9月25日(火)～10月4日(木)

団員名簿

団長	寺澤 實	北海道大学農学部林産学科 助教授(天然物化学・植物 生化学)
秘書長	大川 章	東京理科大学大学院理工学 研究科 院生(機械工学)
団員	比田井昌英	東海大学文明研究所 講師 (天体物理学)
"	清水 利文	名古屋大学工学部鉄鋼第4 講座 文部技官(金属物性)
"	黒田光太郎	名古屋大学工学部金属学科 助手 (金属物理・電子顕微鏡学)

団員 花井 孝明 名古屋大学工学部電子工学科 助手 (電子線機器工学・電子顕微鏡学)

” 志賀 聖一 群馬大学工学部機械工学科 助手 (熱工学)

” 藤崎 敬介 東京大学大学院工学系研究科 博士2年 (電気機器・磁気浮上車輛)

団員 森島 繁生 東京大学大学院工学系研究科 博士1年 (パターン認識, 計算機科学)

” 三角 えり 北海道大学農学部農芸化学科 3年

最近の中国科学技術

◇中国で年末にワープロ生産開始

1時間に1万語を入力

〔北京9月11日発新華社=中国通信〕中国で今年末に、FMB超小型中国語ワードプロセッサが生産され、報道機関、出版社、解放軍、政府機関で試用される。製造元はFMBワープロ開発者の林才松氏が最近北京に設立したFMB技術実験室所属のFMB技術開発公司。実験室設立にあたっては、中国科学院広州電子技術研究所、中国社会科学院言語文字応用研究所、華南工学院から支援を受けた。

FMB技術実験室は、技術開発とシリーズ製品の普及を一体化した、多くの地域、部門、業種にまたがる新しい形の研究・生産組織で、FMBシリーズ製品の普及、FMB技術の一層の開発、宣伝・サービス業務、さまざまな形態によるユーザーと実験室との連絡の緊密化を主な任務としている。

実験室主任の林才松氏は、「今年6月以降、中国語ワープロについて問い合わせる多くの手紙が国内国外から来ている。この機構設立の目的は、わが国のコンピューター普及・応用を促進し、社会の情報化を進め、文字改革事業の発展をはかり、4つの近代化の早期実現に務めることだ」と語っていた。

同実験室の設立後、北京でFMB中国ワープロ講習会と競技大会が行われた。9月9日、練習を始めて38時間という7人の出場した決勝で6人が1時間当たり1万字以上を打ち、習いやすく速く

打てるという特色をはっきりと示した。

◇中国ソフトウェア協会が発足

〔北京9月6日発新華社=中国通信〕電子計算機のソフトウェアの研究、開発を行っている業界の連絡機関、中国ソフトウェア協会が6日北京で発足した。

同協会は、電算機ソフトウェアの研究、開発、生産、販売、維持、教育、管理などに従事している団体、個人が自由意志に基づいて結成した全国的な交流協力機構で、地区や部門の制約は受けない。

中国には現在、ソフトウェアの研究、生産を行っている団体が数百あり、約2万人がこれを従事している。

協会の主たる任務は、①ソフトウェア業界の設立と振興②業界内の連合、協会の組織と調整。③国際交流の拡大④国の委託研究⑤業界の発展計画と技術経験政策の研究、提出⑥人材養成⑦業界と会員の合法的権利の保護 — などである。

名誉会長には江沢民電子工業相が就任した。

◇北京市光通信技術研究開発センター発足

〔北京8月11日発新華社=中国通信〕北京市光ファイバー通信技術研究開発センターが11日発足した。

同センターは二十数単位からなる研究、開発、応用、サービスの連合体で、有償の契約制を実施する。主な仕事は、科学技術成果の普及、各種光通信システムの提供、応用開発による新技術の試用段階から標準化、商品化への移行促進となっている。